

花王教員フェローシップ「スリランカの寺院のサル」体験報告書

■ 報告者：鈴木眞由美（東京都・啓明学園教諭）

□ 調査日：2004年8月2～14日

今回のプロジェクトはトークマカクというニホンザルと同じ種類のサルの生態を調査するものであった。動物の生態の調査は私にとって初めての経験だったので、その方法や結果など、どれをとっても興味深いものだった。調査は早朝から始まり、サルと共に行動し、その生態を観察するものだが、中心となるのは、彼らの行動とその食生活の実態を観察する事であった。

先ず、彼らの食する植物の主なものを、直接フィールドでレクチャーを受け、自分で見極めが出来るようにする（これがなかなか難しい、そのときはわかったつもりでいても植物の葉や花、実などなかなか覚えきれなかった）そして指定された群れの中で担当のモンキーを与えられ、移動を伴いしながら彼らの記録をとってゆく。

今回のプロジェクトの調査は、実際におこなってみると合理的で、その数字からわかることも多くあった。



（新聞を読む？いえいえ新聞に付いたゴミを食べるサルたちです）

長い時間をかけて研究者たちが築いた調査法は、私のような素人でもすぐに参加できるような合理的なものであった。

今回直接自分自身で調査に携わって、自分の専門外の学問の研究について見識が広がった。興味を持っていても具体的な方法や状況などまったくわからなかったが、今回の体験で多くのことを知った。またスリランカの大自然や野生動物の豊富さ、歴史ある遺跡のすばらしさを知ることができた。



（現地スタッフに興味津々の子ざるたち）

学校教育の場においては、自分自身興味を持っていたが、なかなか具体的に参加することができなかった生物学や生態学の研究について、体験した範囲内で生徒たちに伝えることはできると思う。（彼らにとってもまた未知の世界であろう）

環境について考えるのにも、ただゴミを捨ててはいけないとか、自然を守らなくてはいけないというのではなく、そこに含まれている野生動物の抱

える問題や、そこに生きる人々の生の姿をも含めた、多角的な見方を持つ必要があることを痛感した。これは実体験を通してでなくてはもてない見解だと思う。

実際の授業では、国語の教科書の中で「地球環境」や「野生との共存」などという題材が多くある中で、それらを学習する上で今回の実体験を、具体性を持った話として取り入れることができると思う。

また、環境問題だけに関わらず、真の意味での国際人とかグローバル化とはどういうことかを考えさせられた。スリランカの人々は日本への関心が非常に高く、様々な質問を受ける中で、我々自身の自国の文化への理解はどれほどのものがあるだろうと考えさせられた。改めて授業の内容を再確認するとともに、小論文の授業などでもテーマとして、様々な角度でアプローチしていきたい。

今回の経験は、中学生から高校生まで幅広く授業で扱うことができる。生徒たちに見たり、触れたりした研究や、遺跡などの文化の一端を紹介したりしながら授業に活用したいと思う。実際肉眼で見ないとなんか実感出来ないものもあるが、現地ですべてのビデオや購入してきた写真集なども活用しながら伝えていきたい。生徒たちの柔軟な感受性は、私の目を通しての間接的な経験からきっと多くのものを吸収してくれると思う。